

eラーニングと全カリ ～その可能性を考える～

日時：2007年12月3日（月）18：00～20：00

場所：池袋キャンパス A204 教室

基調講演：「大学教育における eラーニングの現状とその可能性」

吉田 文氏（独立行政法人メディア教育開発センター 研究開発部教授）

事例報告：

1) Rikkyo English Online プロジェクト

川崎 晶子（英語教育研究室主任・コミュニティ福祉学部教授）

2) オンデマンド授業「平和と安全保障」の試み

五十嵐 暁郎（法学部教授）

3) 立教大学の eラーニング環境の支援体制

佐藤 雅信（メディアセンター職員）

指定討論者：山口 和範（教務部長・経営学部教授）

司会：松本 茂（全学共通カリキュラム運営委員・経営学部教授）

【第一部】

○司会 特色ある大学教育支援プログラム、通称、特色 GP 採択記念シンポジウムの第3弾といたしまして、「eラーニングと全カリ～その可能性を考える～」という統一テーマで本日のシンポジウムを開催させていただきます。

まず、主催者側を代表いたしまして、山本博聖全カリ部長よりごあいさつ申し上げます。よろしく申し上げます。

○山本 山本です。ご来場いただきありがとうございます。まず今日は吉田先生にeラーニングについてお話しただきたいという趣向になっております。

吉田先生には以前、全学共通カリキュラムの外部評価をご担当いただきました、さらに、その採択された立教科目

についても我々がプレゼンテーションを行った会場に座っておられまして、そのおかげでぐっと落ち着いてプレゼンテーションできました。ということで、吉田先生には非常にお世話になっています。また今回は無理を言いました、このシンポジウムの基調講演のお願いをしました。快くお引き受けいただきまして、ありがとうございました。

私の挨拶はこのくらいで、さっそくシンポジウムに移りたいと思います。よろし



松本 茂（司会）

くお願いします。

○司会 ありがとうございます。

現在、さまざまな大学でeラーニングについて取り組みがなされているわけですが、必ずしも活用しきれていないのではないかとというような認識がごあります。このeラーニングは、遠隔教育の流れをもって行われている、あるいは授業を補完するためのブレンド型のeラーニングとか、さまざまな活用の仕方が模索されているわけです。本日は「eラーニングと全カリ」というテーマで進めていきたいと思っています。

申し遅れましたが、本日の司会を務めさせていただきます全カリ運営委員の松本でございませう。よろしくお願ひいたします。

それでは、まず基調講演者をご紹介させていただきますと思います。本日も講演をいただきますのは、独立行政法人メディア教育開発センター教授の吉田文先生でございませう。タイトルは、「大学教育におけるeラーニングの現状とその可能性」ということでございませう。

吉田先生には、先ほど山本部長から説明がありましたように、全学共通カリキュラムの外部評価委員をお務めいただきました。ご専攻は教育社会学、高等教育で、ご著書には、『人間情報科学とeラーニング』、『大学eラーニングの経営戦略—成功の条件』、『アメリカ高等教育におけるeラーニング—日本への教訓』など、多数ございませう。私も司会者ということで勉強させていただきますして、本日のテーマに関連したものとしては特に、この『アメリカ高等教育におけるeラーニング—日本への教訓』と『大学eラーニングの経営戦略—成功の条件』は、私たち立教大学の関係者にとってもさまざまな示唆に富む内容です。

私自身も今日のご講演を大変楽しみにしております。この分野の第一人者の吉田先生をご紹介したいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

○吉田 メディア教育開発センターの吉田でございませう。どうぞよろしくお願ひいたします。

今回のお話を山本部長からいただき、何を話そうかなといろいろ考えました。日本でeラーニングというと、最近起きた新しい現象、特殊なものという見方が強い部分がありますが、実は欧米で行われているeラーニングを見ますと、それまでの遠隔教育の延長上にあり、それに対する需要がある中で行われているという状況があるということが、今日のお話のポイントです。

さらにもう一つ、日本の場合には、幸運なのか不幸なのか分かりませんが、教育のグローバル化の影響をほとんど受けていないという状況です。

他方、欧米では、eラーニングは高等教育のグローバル化を牽引しているという状況もあります。今後、日本の大学の問題を考えるにあたって、eラーニングを単に閉じた空間の中における教育という問題ではなくて、日本という場を世界に広げる、あるいは世界が日本に入ってくる一つの手がかりになりうるだろうというようなことを考え、諸外国の状況と日本の状況と合わせて概観していきたいと思ひしております。

今日は5点にわたってお話をさせていただきます。

まず第1点は、遠隔教育の歴史のなかでのeラーニングの位置づけの話。第2点は、英語先進諸圏におけるeラーニングの動向。第3点目は、発展途上国におけるeラーニングの動向。この2と3を併せまして、eラーニングを手段として、高等教育におけるグローバル化が進んでいるということをご確認いただければと思ひます。そして世

ーニングと全カ

2007年12



吉田 文氏

界の状況を見たあと、第4
点目は、日本の
高等教育の中
でeラー
ニングが今ど
の程度行われ
ているかとい
う状況を確認
し、そして最
後は、私人の
域ですが、日
本におけるe
ラーニングの
可能性につい
て、いくつ

つかポイント
を提示したい
と思います。

遠隔教育は、教育の機会をなるべく
多くの者に与えようという理念に支え
られてきました。これは、近代社会に
おいて、教育にとっての望ましい理念
として課せられていたわけです。なる
べく多くの人に教育を与えるという
ことを、私たちは是と信じて教育機会
を拡大してきました。ただ、それでも
教育の機会にあずかれない人もいま
す。それは、時間と空間を縮減できな
い人です。学校という場に来られない
人、授業をやっている時間帯に来ら
れない人。そういう人たちにまで教
育の機会を拡大するにはどうしたら
いいかということで始まったのが、
遠隔教育という手法です。

時間と空間の距離を縮減するため
には、何らかのテクノロジーが必要
です。そのテクノロジーとして登場し
たのが、第一世代の郵便制度です。
この郵便制度を利用して、印刷教材
を学生のもとに送る。学生はそれ
を勉強して試験を受けたり、レポ
ートを書いて大学へ送り返すとい
う方法が、アメリカの高等教育で
開始されました。1892年のこ
とです。100年を優に超える昔に始

まっております。日本の大学の通信
制の課程では、現在もまだこのよ
うな手法で行われることが多いです
ね。

ただ、このシカゴ大学のエクステ
ンションで開始された遠隔教育は、
正規の学位を与える課程ではあり
ませんでした。

その次の第二世代が放送です。ラ
ジオのほうは、1910年代後半か
ら20年代の間に始まっているので
すが、ラジオはあまり人気があり
ませんでした。

そのあとアメリカでは、1930年
代から実験的にテレビを使う方法
がとられていました。それが本格
的にかつ大々的に始まり、高等教
育という形態をとったのは、やは
り1967年にイギリスにオープン
ユニバーシティができたことを特
筆すべき事項として挙げておきた
いと思います。

このイギリスの公開大学は、正
規の大学として学位を授与してい
り、博士課程まで持っております。
ここではすべて遠隔教育の形態
で授業が行われます。イギリス
の公開大学は、遠隔教育のモデ
ルとして全世界的に広がりを見
せています。

日本は、放送大学が公開大学の
一つですが、イギリスで公開大
学が開設されたころに、日本でも
計画がありました。もちろんその
当時、一番需要もあったわけ
です。ただ、いろいろポリティ
カルな状況が絡み、日本の放
送大学は非常に後発のスタート
で、その頃には、大学への進
学需要は安定期に入っていました。

他方、1970年代の発展途上
国では、増大する高等教育需要
をどのように満たしていくかとい
う課題に対して、イギリスの
公開大学を一つのモデルとし
て遠隔教育機関がつくられた
のです。例えばお隣の韓国も
そうですし、台湾では空中大
学、中国では電視大学と呼ば
れています。さらに、タイ、イン
ド

ネシア、マレーシア、インド、パキスタン、トルコとほぼすべてで公開大学が設立されました。高等教育需要をキャンパス型の大学でまかないきれない時に、それを公開大学の手法で吸収していきまわ。

そのあと、ここでは第三世代としてインターネットを挙げたいと思います。実は、2.5世代ぐらいに位置して、1980年代に、衛星によるテレビ会議システムというものがあります。技術的に見れば、放送の次に来るのはこのテレビ会議システムですが、あまり広がりを見せませんでした。なぜならば、テレビ会議システムは時間と空間の距離の縮減という点においてやや難があります。テレビ会議という装置が必要です。そうすると、ある固定した場所が必要です。また、同じ時間帯にやりとりをしようとする場合、同じ時間に集まらなくてはいけないということで、時間と距離の縮減という点で難がありました。それとともに衛星の回線の使用料が高いということが妨げとなっていました。

遠隔教育のテクノロジーは、郵便から放送と変化しましたが、なぜこれらが使われたのでしょうか。それは安いからです。全国にくまなく郵便のネットワークが広がり、非常に廉価に利用できるという状況があつて初めて、その上に乗ることができます。放送もそうです。放送も全国どこでも、スイッチを入れればテレビが見られるという状況になっていなければ、あまり意味を持ちません。

そうになった時に、通信衛星を使った遠隔教育は、時間と空間の縮減という点でも、費用という点でもやや難ありと言っていた時に、インターネットが登場しました。インターネットは軍事目的で開発され、それが一般開放されたわけですが、全世界津々浦々まで広

がりを持てるネットワークになった。しかも、無料で使えるということ、さらに技術的な点で言えば、双方向性が非常に容易にできるようになったということ、それから、もう少し技術的な点で言えば、マルチメディアが使えるようになったことなどメリットが多くありました。マルチメディアというのは何かといいますと、テキストと音声と映像、映像には静止画と動画がありますが、それらを一体化してPC上で使用できることを言います。たとえば、コンピュータの中でPowerPointを利用すれば、テキスト、ストリーミング・ビデオなどを一体化して扱うことができます。要は、デジタルの技術のおかげで、私たちの日常空間を構成しているメディア環境が、コンピュータの中に容易につくれるようになったのです。

インターネットは、爆発的に拡大しました。インターネットを使用した遠隔高等教育がいつ始まったかについては、1989年にフェニックス大学が行った形態を原初的なものと捉えることができるでしょう。ただ、この当時まだインターネットではなく、コンピュータのネットワークを使ってメインフレームにモデムでアクセスするという方法でした。それでも、キャンパスに一步も足を踏み入れることなくMBAの学位が取れるということを謳い文句にして、正規の学位を出すプログラムを始めています。

インターネットが爆発的に普及したのは1995年です。これはWindows95が売り出された年で、それまでのWindowsより使い勝手がいいということと、ブラウザとしてInternet Explorerが公開された年です。これ以降、インターネットは全世界的に、爆発的に普及していきますし、それと歩調を合わせるかのように、インターネットを使って教育を提供する形態のeラーニングも

広がりを見せています。

ここで言いたいことは、eラーニングは、遠隔教育の各種のノウハウの蓄積があって、その上に成り立っているということです。技術はいくつか交代しましたが、その背後にある理念、つまりこの100年の歴史の遠隔教育が何を目的としてきたかといいますと、教育の機会を拡大するということでした。とくに、遠隔教育の場合、主に対象としてきた学生層は、すでに職業を持っている成人です。その人たちが教育を受ける場合の時間と空間の制約を解くために、遠隔教育という方法はメリットがあるのです。それを高等教育が担ってきたということです。正規の学位が授与されるものも多いですが、教育内容は成人対象の職業教育的なものが多いというのが、これまでの経緯です。

さて、そのeラーニングについて、英語先進圏ではどのぐらい実施されているかを、最近行われた調査をいくつか見ていきましょう。アメリカは、2006年に単位取得が可能なeラーニングを開設している高等教育機関が76パーセントにのぼっています。eラーニングを受講している学生数は349万人で、2002年の160万人から大きく伸びています。この349万人は、高等教育機関の全在学者の約2割にのびます。

次にイギリスの状況を見てみましょう。イギリスは、先ほどの公開大学で学んでいる学生は18万人です。ただ、公開大学は全てをインターネットで実施しているわけではなく、従来型の放送を中心として実施しています。指摘したいのは、正確な数字がよく分からないのですが、在学者のうち数万人は海外からの受講者といわれています。特にイギリスの旧植民地であるシンガポール、香港、マレーシアといったあたりには、多く在学者がいるそうです。

では、イギリスの国内の大学ではどうなのかといいますと、キャンパス型の大学の中での遠隔教育型のeラーニングの実施率は11.9パーセントで、必ずしも多くはありません。では、そこに、ブレンディッド型、つまり対面授業と組み合わせたeラーニングを実施しているところを加えますと、33.0パーセントになります。では、そこにさらに授業の資料等をWebに掲載して、授業後に見られるといった形で実施しているところを加えると、75パーセントになります。すべてを遠隔教育型のeラーニングで実施しているところは必ずしも多くはないですが、ブレンディッド型、あるいは、授業の補完型でやっているところは、相当数にのぼっているということは見とれます。

オーストラリアについても、ほぼ同様なことが言えます。キャンパス型の大学で実施している遠隔教育型のeラーニングは、イギリスよりはやや多く18.9パーセントですが、アメリカには及びません。遠隔教育型にブレンディッド型を加えると半数弱47.0パーセントになります。さらに授業資料の掲載等を加えると87パーセントになります。

イギリスやアメリカのeラーニングは、それをどのように定義するかによりますが、三つぐらいに分けてみればよいかと思います。最も広義にとらえれば、8割から9割の高等教育機関が実施している。ただし、非常に狭義なeラーニングでとらえると、1割から2割。その範囲で考えていただければいいのではないかと思います。

ただ、授業資料の掲載という次元まで含めて考えて、8割から9割が実施しているということは、実はここにはLMS (Learning Management System) というソフトがほぼすべての大学に入っているという背景があります。それを前提にして、さまざまな形態でのeラー

ニングができるという状況があります。

次に、発展途上国のほうはどうでしょうか。今、最も発展を遂げている高等教育市場はアジアです。アジアでも特に中国です。それとともにもう一つ先進国から非常に注目を浴びているのは、アジアにある英語圏です。先ほど申し上げたように、シンガポール、香港、マレーシア、インド等は、旧イギリス植民地だったということもあって、英語が半公用語的に使われます。こうしたところに対して、英語先進圏はeラーニングという手法を使って高等教育を輸出しております。これは、WTOによる推進も後押しになっています。しかし、発展途上国の先進国の大学の学位に対する要求が非常に強いことも大きく関わっています。従来、これらの国々は限られた人を留学で送り出していました。しかし、国内にいながらにして同じ内容がeラーニングで学べるということであれば、さらに多くの人が教育機会を獲得できるというのが、先進圏側の考えです。

また、アジア側から見ても、留学する費用まではないけれども、eラーニングで受講するならなんとかなる、その費用がまかなえると思った時に、そこで双方のあいだで商談が成立しているという状態です。

例えばシンガポールでは、高等教育機関在学者の56パーセントは国外の高等教育機関の授業を受講しているというデータがあります。シンガポールには、国外の大学が多く分校を設立しています。そこに教員を送り込んで授業を提供するというような形の分校が、国外の高等教育受講者の半分になります。

また、イギリスの高等教育の受講者、そのうちには公開大学の受講者が多く含まれていますが、それが4分の1を占めています。さらにオーストラリア



の高等教育を遠隔教育の形態で受講している者が4分の1となっています。このように、英語先進圏のeラーニングは、アジアに多く入っております。

ところで、日本でこういう事例をご存じでしょうか。例えば、学生が海外の大学のeラーニングを受講している、あるいは、海外のどこかの大学と提携して、自分の大学の単位に互換できるコースとして提供している大学などをご存知の先生方はいらっしゃいますでしょうか。もしあったら、ぜひ教えていただきたい。私もいろいろ調べていますが、よく分かりません。それぐらい、日本では、海外のeラーニングとは無縁なのです。

では、日本の高等教育機関は、どの程度eラーニングを実施しているのでしょうか。ここに提示したデータは、4年制大学の学部を単位とした比率です。例えば、インターネット授業を配信している大学は、2004年の段階で19.4パーセントと2割弱です。それが、単位認定しているインターネット授業になると、5.4パーセントほどになります。さらに、海外からの単位認定をするインターネットになると、0.4パーセントという状態です。

なぜ日本では遠隔教育型のeラーニングが、少ないのかということになりますと、一つは遠隔教育についての伝統があまりないということがあります。したがってeラーニング、インターネットに教育を載せるという手法が入って

きた時に、そこに合わせていくという流れが非常に弱いのです。

確かに、日本でも、一部の私立大学は通信教育部を持っていらっしやいますね。そこの在学者は、通学制の大学の在学数の9パーセントです。非常に数が少ない。

もう一つは、遠隔教育を受講する主たる学生層であった社会人が、大学にもどって学習する慣習が弱いことを指摘する必要があります。日本の高等教育機関において、仕事もあり、家庭もありといった、いわゆる社会人学生は10パーセントにはなりません。

ただ、興味深いのは、既存のキャンパス型の大学とは違うところが、eラーニングに手を伸ばし始めていることです。象徴的なのが、株式会社大学のeラーニングです。サイバー大学、ビジネスブレイクスルー、レックなどの株式会社大学は、eラーニングを導入しています。数は少ないですが、既存の大学ではなく新規参入した大学が、一様にeラーニングに関心をもっているという状況は見過ごすことはできません。

他方、既存の教育機関は遠隔教育型のeラーニングを実施しているところは少ないですが、ITそのものは次第に利用されるようになっていきます。1999年から2004年までの変化を見たところ、例えばPowerPointの利用は65.5パーセントから89.4パーセントへと非常に増えております。電子メールなどでレポートの課題を提出するということも、52.6パーセントから67.6パーセントへと大きく伸びています。シラバスや次週の予告などの情報をWebに掲載するところも、ここ6年間で31.8パーセントから61.6パーセントへと倍になっています。

これらから、高等教育におけるICT (Information and Communication

Technology) の利用は、ほぼ不可欠だと考えられるようになったことがわかります。

それでは、教育を担当する教員の側は、どのくらい使用しているのでしょうか。これは2006年に行った調査です。PowerPointを授業で利用されている先生は72パーセントにもものぼっています。PowerPointの利用はかなり一般化しています。授業においてインターネットで検索した情報を配布している先生も75.1パーセントとかなり多いですね。

ただ、次に教材や資料のWebでの掲載になると、30.8パーセントと少ないですね。先ほどの高等教育機関対象の調査では、6割が実施していると回答されていますが、個々の先生に聞くと、3割になります。授業に関する自習用の練習問題のWeb掲載は15パーセントです。PowerPoint等を利用されるという点で見れば、教員のICTに関するレディネスは、相当あると言ってもいいでしょう。しかし、個人の自律性の高い講義の中で、やりたい人が、できる人が私用する状況になっています。ある程度、組織的な取り組みが必要なWebの利用へは広がっていないということなのでしょう。教員のICTの利用は、個人の選好に依存する点の集合になっているというのが実態かと思えます。

このように見てきますと、日本の大学のICTの利用は、どうなっていくのでしょうか。繰り返しになりますが、現状としましては、大学教育の周辺部分での利用は進んできました。しかし、多くは、教育を担当している教員のオートノミーに依存しているような状況です。これを私は点としての利用という呼び方をしています。

その次のステップとして、点が線や面になって、高等教育が組織的にICTを利用するようになるかという問題が考えるべきことでしょう。そのために

は、やはりFDというのは欠かせないと思います。FDというのは、単に教員の個人スキルをあげるということではなくて、教員全体で組織的に取り組むといった土壌を持てるかどうかということです。

日本は、遠隔教育型のeラーニングというのは、さほど盛んではありませんでした。その需要が顕在化しない状況では、ICTのメリットは対面授業の補完のような形態での利用にあるでしょう。授業の予習や復習、授業の延長の議論や課題の場のような利用方法があるでしょう。しかし、そういった形態でのICTの利用は、遠隔教育としての利用と同根ではないかと思っています。なぜかといえば、遠隔教育とは時間と空間の距離をどのように縮減するかというものでした。教授学習課程においてICTを利用することとは、対面教育の授業以外の場面を、遠隔教育で補完するという形での利用です。教員と学生との時間と空間が離れている点では、どちらも同じです。

一番最初の問いに立ち返ってみれば、教育の機会を拡大するという理念のもとで、われわれは近代社会の教育をとらえ、遠隔教育を究極の形態としてきました。それは、教育の機会にあずかれない人に教育を与えるということだけでなく、いかに学習を強化するかという側面があって、各種のテクノロジーが利用されてきました。

日本におけるeラーニングの可能性ということ言えば、遠隔教育型よりもむしろ対面型の授業をコアにしなから、そのプラス α をいかに増やしていけるかということになるのでしょう。しかし、それは遠隔教育としての利用とまったくかけ離れたものではなく、時間と空間の距離を縮減したところで学生の学習を強化するという共通の目的があるということをご理解いた

できればと考えております。

以上で私の話を終了させていただき
ます。どうもありがとうございました。

○司会 とても示唆に富む内容でした。内容もすばらしかったですが、予告どおりびつたり時間どおりお話しいただきまして、感服いたしました。

立教大学の場合には、遠隔教育の歴史もありませんし、社会人学生の数もあまり多くないので、吉田先生がおっしゃったように、ブレンディッド型、つまり対面教育との補完型のeラーニングの活用ということが課題なのかなと思いました。

それ以外にも、今日のお話の中で、他大学、特に海外の大学とのやりとりの可能性という点は、私が所属する経営学部は、海外の提携校とのやりとりを重視しているものですから、大変興味深く聞かせていただきました。

また、立教大学の場合には、池袋と新座とキャンパスが少し離れておりますので、教育の内容を幅広くするためにも、遠隔型eラーニングの可能性があるのかなということも感じました。

それでは5分ほどフロアからご質問を受け付けたいと思います。記録のため、ご質問の際はご所属とお名前をお願いできればと思います。どなたかございますか。外部の方ももちろんご質問していただいて結構です。対面式ですので、気軽にご質問いただければと思います。

○五十嵐 法学部の五十嵐です。お話の4番目のところで、日本のeラーニングの実態で、株式会社という話をなさっていらっしゃるけれども、成果はどんな具合になっているのですか。始まったばかりかもしれませんが、

○吉田 卒業生がまだ出ていないので、卒業生のアウトプットで判断することができません。では、入学者がどれぐ

らい集まっているかという点では、サイバー大学の場合は定員が非常に多く、それを満たしているという状況にはなっていません。ただ、昨日か一昨日の新聞報道で、サイバー大学については、設置審（大学設置・学校法人審議会）の中でいろいろ問題が指摘されているというところですね。

どういふ点かといいますと、eラーニングのシステムの問題ではなくて、それを運用していく時に、きちんと支援体制がつけられていないとか、当初はもっとコミュニケーションを頻繁にとるといふ話でやっていたのが、実質的にはコミュニケーションがほとんどとられないような状況になってしまうとか、そういったことについて疑問が呈せられています。株式会社立のeラーニングには、授業を画面上に流してしまえば、それですべてよしといった発想が垣間見られます。大学の経営者側が考えている、大学教育がそういったところにあるという問題点が大きいと思います。また、コストの問題と絡んできて、もしきちんと手当てをしようと思ったら、かなりのコストがかかります。eラーニングといっても、学生とのコミュニケーションの頻度を高めていくことを考えなければ、学習は継続しないわけです。その場合には、チューターのような生身の人間が必要です。この点を考えると、人件費などが必要です。おそらくそれをやっていると、経営上なかなか成り立たないということが起こってくるのでしょうか。

○青木 文学部の青木です。サイバー大学などに典型的かと思うのですが、基本的に高等教育というくくりでお話をされた際に、初期の通信教育みたいなものが、特に職業人の、ということはおっしゃられましたけれども、今はどんどんこういうeラーニングが広がってくる中でいうと、やはり人文系

であるとか自然系、大まかに言って人文系、自然系、社会系みたいな分野の違いがある種出てくる部分があるかなと思うんですけども、そのあたりについて、おそらくサイバー大学の問題も少しそこに関係のある部分があるかなと思うので、何かコメントを少し足していただければと思います。

○吉田 これは経験値として、eラーニングにどのような教育内容が多いかを見ますと、基本的に職業教育です。まず、ビジネス系が圧倒的に多く、次に来るのは教育です。これは、教員の再教育としての教育です。それから、健康科学です。これは看護師の再教育と、看護の領域から健康の方面へ幅を広げるような教育内容です。また、工学も多いですが、これはITに関する内容です。だいたいどの国をみてもこの四つぐらいが上位に挙がってきます。純粋な人文系のものとか、純粋リベラルアーツ系のものというのは、数の上では少ない部類に属します。

○司会 まだご質問があると思いますが、時間になりましたので、先生には後ほど第三部の討論のあとのフロアの質疑にもお答えいただくということにして、第一部の講演はこれにて終了いたします。

【第二部】

○司会 それでは、第二部を始めさせていただきますと思います。

第二部は三つの事例報告でございます。学内の3人の方にお話をいただきたいと思ひます。

トップバッターは、川崎晶子教授にお願いしたいと思います。川崎先生は現在、コミュニティ福祉学部教授で、来年4月からは新設される異文化コミュニケーション学部の教授になられます。現在、全学共通カリキュラム運

営センターの英語教育研究室主任として、なんと1,000コマを超える英語カリキュラムを統括されております。今年度からは英語教育研究室のリーダーシップのもと、REO（リオ）と呼ばれる、Rikkyo English Online というインターネットを利用した英語教材を、立教大学の全学生・全教職員およそ18,000人を対象として、利用可能な環境を整えられました。このREOを中心に、15分間と短い時間ですけれども、お話しただきたいと思います。よろしく願います。

○川崎 川崎です。よろしく願います。

今日は、5つの点についてお話ししたいと思います。まず、立教大学の英語教育とeラーニングはどういう関係にあるのか、それからREOの導入の背景、そして内容。さらにREOの導入と利用状況。最後に英語のeラーニングの今後について、私見ではありますが、お話ししたいと思います。

立教大学の英語教育は先ほど先生にお話しいただいたように、やはり対面授業が中心です。そして、その対面授業の中でも、1年生の授業の目的は発信型と異文化対応です。要するに、いろいろな人に対応して、やりとりができるようにということを大目的としているのです。

しかし、その対面授業で培われる英語力だけではなく、PCで伸びる英語力というものがあることにも我々は気づきました。この場合のPCというのは、インターネットを通じてのWeb教材というものなのですが、そういうもので伸びる英語力で、対面授業をささえながら、総合的な英語力の向上をめざしたいという考えでおります。

現在、TOIEC、TOEFLなどの、テストで測れる英語力が世の中で大事にされていますが、それにこのPCで伸びる英

語力がかかなり関連があるようです。PCで伸びる英語力の訓練をしているうちに、テストで測れるほうの英語力もわりやりに上達していくというような面もあることにも気づきました。

しかし、それと同時に、テストで測れない英語力も重要で、そういう意味で、この対面授業とPCの両方をとても大事に思っています。

立教大学でのPC利用の英語は、ALC NAとREOとWebtest（ウェブテスト）の3本立てになっています。NAはアルクが制作しているネットアカデミー、REOというのはRikkyo English Onlineの略で、「レオ」ではなく「リオ」と読みます。それから、ウェブテストをあわせて、この三つが英語教育のeラーニングの中で、重要な位置を占めるようになってきています。

次に、REOの導入の背景を4点ほどご説明します。2006年度から必修授業でR&LPC、つまりリーディングとリスニングの勉強をパソコンを使って展開しています。この授業でアルクのネットアカデミーを利用しているのですが、その背景には、立教の英語教育の変遷があり、そのあたりがREOの導入にもずつと繋がっていきます。

その点について少し説明しましょう。現在の英語の授業というのは、COC (Communicative Course) というコミュニケーションを重視したクラスと、LCC (Language and Culture Course) という、コミュニケーションを重視しつつ、特に言語文化についてのリーディングを勉強しながら、文化とは何かというこ



川崎 晶子

とを考えると、この2つのコースに分かれています。週4日の授業のうち週2回はInteractive World Englishというコミュニケーションの訓練の場のような授業とか、English for Culture Understandingという、言語文化を理解する授業があります。これは全て週2回の授業ですが、それと週1回の半期PCを含むリーディング&リスニングの授業と、あと残りの週1回は、半期でライティング半期でメディア・イングリッシュあるいは、イングリッシュ・スルー・ビデオという、新聞や雑誌を読んだり、ビデオを見たりの授業になります。

学生は週4回英語のクラスを取り、そのうちの前期あるいは後期どちらかの半期で、R&L PCの授業を受けます。1学年の人数は約4,300人ですが、その全員が1年間に半期(前期または後期)、コンピュータを使って英語学習をするというような状態になっています。

全カリは1997年に開始していますが、特に英語必修カリキュラムでは大学全体で基礎教育をやらせよう、統一のシラバスで授業を行おうということをやっている、毎学期末学生の感想を調査しています。2005年のCOCコースの結果を見ると、8割以上の学生が自分が履修したコースに満足していました。ただその一方でちょっと怖い数字があり、英語力がついてきたと思う数字は36.40パーセントとすごく低かったです。これは2005年の結果です。毎年毎年本当に一所懸命、参加して楽しい授業やアクティビティの多い授業を工夫してきましたが、その一方で、英語力がなかなかつかないという事実がありました。そこで、これに対して、ひとつ基礎力を伸ばす工夫をしよう、学生はみな得意・不得意は別々なのだから、そのいろいろ不統一のものをまとめて行う授業の中でも、自分の弱いところを

強化したり、強いところを伸ばしたりできるような授業をやりたい、それができるのはPCではないかということになり、コンピュータを使った英語のクラスを導入しました。

実施初年度に行ったLCC下位クラスのアンケートの結果によると、R&L演習、つまり普通の対面授業では、「力がついてきたと思う」という問いに対しては「どちらとも言えない」と答える学生が多く、45パーセント程度でした。後期はこの学生たちのグループは、R&LのPCを使った授業をしているのですがそれに対して、「力が付いてきたと思う」という聞き方でいきますと、リスニングの力が付いてきた、リーディングの力が付いてきたというのが、演習をやっていた時よりは、PCをやっていた時のほうが、「そう思う」の方が増えていきます。リスニング力は、演習だと33パーセントだったのが、PCだと47パーセントの人が「力が付いてきたと思う」と答えています。これは同じ学生です。同じ学生が、前期では40人もいるクラスですが先生と一緒に勉強して、後期ではPCで勉強した結果を聞いています。実際の英語力のことを測っているのではなくて、学生が自分の気持ちとして、英語力が伸びたと思うかどうか、その気持ちとしては、やはりPCは結構伸びがある、普通の対面授業よりはPCのほうが、力が付いてきたと思う部分が強いということが分かっています。これはまだ1年間しかやっていませんので、その結果なのですからけれども、やはりPCの英語力を培う力というのは、それなりにあるのではないかと考えています。

それと同時に、この背景として、学生がPCを使い慣れているとか、あるいは家からインターネットで宿題などをすることができる環境にあるのかというのを、2006年度からの実施に向けて、

前年度のアンケートで調査したものが
あります。これは2005年度のデータで
す。前期は約2,000人の学生が履修し
ていて、そのうちの78パーセントが、
自宅からインターネットを利用するこ
とができると言っていました。後期で
は81パーセントですから、だいたい8
割ぐらいの学生たちが、自宅からも使
えるという環境にあるわけで、パソコ
ンに慣れていると私たちは判断しまし
た。PCやインターネットを使って、英
語の授業を展開することは、十分でき
るという裏づけがとれたという感じな
んですね。

次に教材として、どういうものがある
かということになりました。自分たち
で制作することは不可能だろうと。
それよりは市販されている製品に良い
ものがあるということで、「スーパー英
語アカデミック版」というものに出会
いました。これは偶然ですが、英語単
位未修得者に対して実施している英語
単位認定試験について、もっといいも
のではないかしらと探していた先生方
が出会ったソフトだったのですが、ふ
たを開けてみたらものすごくたくさん
のコンテンツがあるものだということが
分かりました。先ほどのネットアカデ
ミーは、ユニットが50と50で100種
類ぐらいの練習問題があるものですが、
それに対して「スーパー英語」は800
ユニット以上あるものでした。そして
また内容が、英語で一般教養を学ぶ教
材編成ということで、話題がとても豊
富でした。それから、いろいろな練習
問題や練習の仕方が入っていて、実
は一つのユニットをやるのにだいたい1
時間ぐらいかかるようなしっかりした
教材でした。もちろんインターネット
に対応していて、インターネットで繋
がることができるということが分かり
ました。内容は本当に豊富です。医学、
物理学、化学、そして自然科学関連で

は、生物や天文学も入っています。人
文社会、科学関連では政治、経済、地理、
哲学、心理学、歴史、考古学など。リー
ディングではこういうわりにしっかり
とした内容のものがあるし、それから
リスニングでは、日常会話というのは
当たり前ですが、大学のキャンパス内
での会話や講義も入っています。大学
生のためにということで教材を編成し
直して新しく開発されたものだという
ことで、内容も非常に気に入りました。

立教大学の英語の環境を見てみま
しょう。この全カリ、私たちのやって
いる1年生用の週4回の全カリの学習
の環境があります。必修で4種類ある
中の、前期・後期で8種類になります
ね。そのうちの一つのR&L PCと、そ
のほかにも図書館に行けばいろいろなメ
ディアがありますし、学部の学習環境
もあります。そういう大学内での学習
環境の外に自宅などの学習環境として、
Rikkyo English Online (REO) という
ものを考えました。

REOのシステムでは、立教大学の学生・
教職員に全員IDとパスワードが与えら
れます。URLにアクセスした後にこれら
を入力すれば、個々人のページにつな
がることができます。REOはもともと
「スーパー英語アカデミック版」という
名称でしたが、制作会社からは、大学
それぞれが自分たちでレイアウトを考
えてよいということでしたので、立教
の写真を数多く編集して、このような
デザインになりました。私のIDとパス
ワードでアクセスすると、「ログイン」
「Welcome」と表示されます。それでい
ろいろな講座が受けられるようになって
います。プレイメントクイズとテ
ストバンクがあり、TOEFL、TOEICに準
じたさまざまなテストが受けられます。
中心はトレーニングバンクというリー
ディングとリスニングのユニットがレ
ベル別に入っているところです。具体

的に見てみましょう。イントロダクトリーレベル、これはすごく易しいレベルですが、リスニングなどでは基本構文というものが出てきて、学生たちはこの構文の練習として、音を聴いて文字を入力します。市販のゲームでもこういうものがあるかと思いますが、まったくそういう感じで、楽しくディクテーションができます。

それから、ベーシックレベルのリーディング。「民主主義とは」を選んでみましょう。速読やパラグラフを入れる練習など、こういう感じでいろいろな文章が表示されます。いろいろな読み方もできるようになっており、同じ大学を何度も勉強するようになっていきます。

速読トレーニングのページでは、とにかくどんどん読まなければいけなくて、画面上に表示されている秒数が変わっていきませんが、この秒が終わると文章も消えてしまいます。ですから、とにかく必死に読まなくてはなりません。

我々はこの REO という教材で、英語教育環境全体を包み込んだわけです。その後、学生だけではなく教職員にも環境を広げ、実はとてもたくさん的人数、先ほど 18,000 とご紹介いただきましたけれども、そのあと教職員も加わりましたので、現在では 20,000 人以上が ID を持っている状態です。ただし、まだ宣伝不足とかいろいろありますので、実際にはログイン数だと 2,800 人ぐらいですね。これは、ユニークユーザー、一度でも触ると数に数えられています。それが 2,800 人ぐらいということです。7月に学生に ID を送りますとアナウンスしたら、500 人ぐらいが関心を持ったようです。その後からは少しずつ下がっているようです。さらに 10月になって教職員に ID とパスワードを配布しましたので、そこでまた増えています。

学部ごとの数字も出ています。利用率の高い観光学部、理学部などは、実は私が PC の普通授業を持っていて、授業の中で REO の宣伝をしているんですね。宿題にこれをやっておくと力がつくよ、などと紹介したわけですが、それで少し増えたりしているのではないかと思います。

立教では対面授業と、それを補う意味での PC 授業があります。さらに REO はその外側にあって、授業で覚えたやり方、PC を使った英語の勉強の仕方を家庭でもやってみることができます。あるいは、先生主導で活用できます。授業で PC を使う勉強を奨励しながら、つまり、対面授業で一所懸命ディスカッションをやっているのだけれども、まだボキャブラリーが足りないなと先生が思ったら、では REO のこれをやってごらんさいとか、あるいは、分野がいろいろありましたから、何かの話題で、みんなやっぱり理学部だけど全然理系英語が分かっていないじゃない、ということになったら、理学系のリーディングをここで自習してもらおうとか、いろいろな形で活用できます。まず先生が REO を理解してそれを自分の授業内で宿題として課すとか、あるいは周囲に勧めるとかが第一歩でしょう。そういう意味で英語の学習環境としてやっとな存在させたところなので、これからそれをどう活かして有機的に実際の英語の授業や学生の英語力に結びつけるかということが大切だなと思っています。

今後の REO のことになりますが、まず活発に活用してもらうため、少なくとも活用マニュアルみたいなものをつくらなければいけないと思っています。実は、高校生（推薦入学など秋季入試での合格者）のための簡単なマニュアルは作りました。あとは、理想としては教職員用も作りたいと思っています。

が、まだできていません。それから、PCクラスとの連携ですね。さらに他のクラスや試験での利用。これからはいろいろな形の授業というのがあっていいと思いますので、REOを中心にした勉強でも単位をあげてもいいのではないかと考えています。ただし、それぞれの特徴というのもやっぱり活かして、REOを使うのであれば、PCで勉強できる特徴のあるところを目的としてシラバスやカリキュラムを考えなければいけないと思っています。

それから、運営部門の専門化・効率化というのが一番の悩みです。今は英語教育研究室がやっている形になっていますけれども、先ほどの1,000コマの運営だけでかなり負担をかかえているものですから。実は最初にパスワードを配った時大変な騒ぎになりました。REO専用のEメールアドレスに何十通も質問や文句が来てしまい、「なぜ頼みもしないのに送ってきたんだ」とか「これは一体何だ」というのもありました。それから、学生に配ったら今度は先生方から「英語の先生しかまだIDをもらっていないようだが、自分はもうすぐ学会があるから早く欲しい」等とかいろいろなことがありました。やはり専門の支援の組織がいるのではないかと考えています。

立教の場合は1年生のPCクラスの授業で、まず土台をきちんと作っています。コンピュータを使ってとか、インターネットを使ってどう勉強したらいいかまでは教えていると思います。そしてREOを自習環境として置きました。ただ、それをずっと続けていくのには、やっぱりいろいろと励ましも欲しいだろうし、何か指導も欲しいだろうと思います。その部分がまだ全然手薄です。

それからもう一つ、先ほどちょっとお話しましたがけれども、ウェブテスト

を2010年に導入しようと思っています。入学時にウェブテストを受けて、自分の英語力を、リスニング・リーディングそれぞれどれぐらいの実力が把握し、授業を受けながら1学期の終わりにまたテストを受け、学年末にテストを受ける。そういうことをやることによって、自分の英語力をある程度、点数で測れる部分だけは把握できると思うんですね。それを続けていくことによって、2年生以上は自由選択科目を履修する形になりますけれども、自分のことを伸ばしたいとか、本当に伸びたかどうか、テストで変化を見ることができると。そういうようなことができれば、それはもしかしたら一つの継続する地道な学習のもとになるのではないかと我々は考えています。ですから、これからはREOとPCの普通の授業と、ウェブテストの3つを組み合わせ活用しながら、一番大事な対面の、本当に発信できる、異文化に対応できる英語力をつける英語学習ができるようになったらいいなと思っています。

○司会 どうもありがとうございます。川崎先生には、大人数の学生および教職員を相手にして、外国語教育の中でブレンディッド型のeラーニングの例をお示しいただきました。

続きまして、事例報告2としまして、五十嵐暁郎先生にお話をいただきたいと思っています。五十嵐先生には、一つの正規学部のオンデマンドの授業の例としまして、先生が2005年に制作されました「平和と安全保障」、そして2006年後期および今年の後期で、インターネットを通じて単位を出す授業として開講しておられますので、コンテンツを制作した時の苦労話等含めまして、お話をいただければと思います。よろしくお願ひします。

○五十嵐 五十嵐です。今、ご紹介をあげたことについてお話ししたい

と思います。このオンデマンドの授業のコンテンツをつくったのは、ここに書いてある採択がされたあとの授業としてでしたので、お話があったのはもう秋になったころでした。その年度中につくらなくてはいけない話でしたので、スケジュールはかなり厳しかったです。12章立てぐらいのもので、それぞれがかなり内容の濃いものだったものですから、どうしようかと思ったのですけれども、平和教育という、お金の縁がない分野でかなり充実した準備ができるというので飛びつきました。

ちょうど立教大学で平和コミュニティ研究機構という、平和研究所がスタートした時でもありましたし、また、全カリの立教科目に「平和」という科目群ができたり、あるいは大学院で平和コミュニティ研究科目という科目ができたりして、実は立教大学は日本の大学の中で、最も平和教育科目が充実した大学になったのです。学内でもあまり知られていませんけれども。そういうことで、ここは頑張っつてみようと思いました。

この「平和と安全保障」という内容は、従来の平和研究の多くの場合のように理念的なものでもなく、一方で安全保障という「現実主義」的に実証的なものでもない、両方を併せたようなものです。安全保障論においては、「非



五十嵐 暁郎

伝統的な安全保障論」というもので、国家が武力を使って行う安全保障ではなくて、国家以外にも、NGOとか、あるいは地方自治体とか、そういう主体も含めて非軍事的な手段で平和をつく

りだすという、そういうことを主にして考えた新しいコンセプトです。この新しい分野は教科書もない状態だったので、私ともう一人、佐々木寛さん（現新潟国際大学准教授）という、彼は立教の卒業生で平和研究の専門家ですけれども、その佐々木さんと組んでやろうということになりました。

資金的にも恵まれていましたので、助手の方に資料を集めることをお願いすることもできました。写真やグラフとか図を豊富に盛り込むことができました。こんなことは確かにめったにないことだと思いました。ですから、それだけに、できるだけ多くの学生に見て、また議論してほしいと思っていますし、コンテンツに対する愛着は非常に強いです。この中で沖縄ロケーションもやりましたが、そこでは雨にたたられて、沖縄で北から南へ車を飛ばして行ったり来たり、右往左往したりしたこともあります。

受講希望者はかなり多くて、履修登録の競争率は10倍近くあったかと思います。ところが、参加率というか、実際にオンデマンド授業を見て、ディスカッションにも参加し、レポートをきちんと書くという学生は意外にも少なかったのです。しかも驚いたことに、最初の授業から参加率は60パーセントぐらいしかなかった。これはショックでしたね。オンデマンド授業に対する期待は高いんですけども、そこにいるいろいろな問題が含まれているということも、その時に感じました。

例えば、一人で対面授業の緊張感を持続することは難しいようです。たまたま私のゼミの学生がいましたが、彼は脱落したということでした。私の顔をゼミでも見、オンデマンドでも見るというのに耐えられなかったのかもしれませんが（笑）。

もう一つは、私たちが張り切ってつ

くりすぎたせいもあって、全カリの科目でありましたが、内容は1年生や2年生にとってはかなり難しすぎたようです。それも難点でした。実は、今年春に、申請書類に目を通して、熱意があふれている者、しかもできれば3、4年生を選んだのですが、やはりなかなか思ったほどの効果は出ない。どうしてなのかなと思ったのですけれども、たまたまこの問題で、早稲田でシンポジウムが去年ありましたが、その時に、明治大学の先生が、やはりオンデマンド授業をやっておられるのですけれども、前期にゼミをやって、その延長線上にオンデマンド授業をやったということでした。これはディスカッションがかなり活発に行われたということでした。これは、一つのヒントではないかと思えます。

つまり、eラーニングと矛盾するような感じがしますが、顔見知りであると議論は活発化するということがありそうな気がします。先ほど平和コミュニティ研究機構のことに触れましたけれども、われわれは平和研究をコミュニティというコンセプトを使って行っています。グローバリゼーションの時代で、いろいろなコミュニティが壊れたりできたりしているんですね。コミュニティに関する研究というのは、この10年ぐらいで爆発的に行われるようになりました。その中に、このeラーニングというか、インターネットのコミュニティというのも、重要なコミュニティとして存在するのですけれども、それを研究した文献によると、インターネットの通信相手というのは、意外にもローカルコミュニティ内部に多いのです。圧倒的多数がローカルコミュニティの隣人であり、また、普段、一緒に仕事をしている人たちだったのです。

コミュニティに属している、belongingsという言葉を使い、そのこ

とがコミュニティをつくるといわれま
す。自分は属しているという感覚を持
てないと、なかなかコミュニティに積
極的に参加することができないという
のが、実はインターネットコミュニティ
であり、eラーニングの学習態度の問題
にかかわってきているのではないだろ
うかと思っています。

オンデマンド授業にはいろいろな可
能性がありますけれど、先ほど吉田先
生の話の中にもありましたように、コー
ディネートする人が必要です。ディス
カッションの中に入って行って、それ
をリードする人がこのオンデマンド授
業には設けてあります。「教育コーチ」
といいます。ここには、たまたまその
時に法学部の助手で、平和研究の専門
家で、助手として非常に優れている。「カ
リスマ助手」と呼ばれた浪岡新太郎さ
んを採用することができました。彼は
一所懸命やってくれて、ディスカッシ
ョンを盛り立ててくれました。ここまで
やる人はいないだろうというぐらいで
したが、なかなか薪に火がつかない
という感じです。彼は現在、パリで大使
館の調査員として勤務する傍ら、パリ
から一所懸命対応してくれています。
このへんはちょっとeラーニングらし
いのですが、なかなかうまくいきませ
ん。

それで、実は今年、ブレンディッ
ド型の授業というのをやってみようか
なと思っています。つまり、「コミュニ
ティ」を意識させるような仕掛けをま
ずやってみようと思います。つまり、
授業の最初の段階で、授業を受けてい
る早稲田大学の学生と立教大学の学生、
それぞれ30人ずつを一度ぐらいは集め
てディスカッションをしてみたらいい
のではないかと、ガイダンスとディスカ
ッションをしてみたらいいのではないか
と思っています。もしこれをやると、
もう少し活発な議論ができるのではな

いかなど期待しています。来年はそれを最初からもくろんでみたいと思っております。

オンデマンド授業は、ディスカッションが主体になるという可能性を持っていると思っています。実は、私のゼミは、eラーニングと言えないかもしれないけれども、テキストを読んだら、学部、ゼミ、大学院のゼミも同じように、ゼミの学生全員にコメントを書かせるのです。コメントを書かせて、幹事の学生に送ります。すると彼、彼女がそれを編集して、コピーして持ってくる。それを見ながら次々に発表してディスカッションするんです。これは、初めは全員に義務を与えるというか、発言させるために使いましたけれども、でも、実際にやってみると、ほかの人の議論にお互い関心を持つのです。特に大学院のゼミの場合、私が授業を担当している21世紀社会デザイン研究科は社会人を中心とした大学院ですが、これは、授業の途中からかなりコミュニティができてくるという感じがします。音楽の演奏を練習しているうちにだんだん面白みが出てくるような感じになってきて、最後のほうはお互いにどういう反応をするかだいたい分かってくる、非常に面白い授業ができてるように思います。オンデマンドでも本当はこういうことができるのではないかなどと思っています。

それから、これも早稲田のシンポジウムで出てきたことですが、学習するにあたって何らかのハンディキャップがある人、なかなか大学に出てこられない人のためには、これはかけがえのないシステムだと思います。

時間がなかなか自由にならない社会人学生たちもそうです。それから、社会人学生のもう一つの意味は、18歳の大学生と違い、自分なりの経験を持っていて、読み込む力があると思います。

これはオンデマンド授業に限らないのですが。そうすると、自分の経験に引きつけて、意味づけを与える力を持っているのではないかと思います。今やっているところでも、早稲田の社会人の女性の学生が非常に積極的に参加しているのは、そういうことではないかと思うのです。

もともとオンデマンド授業は、繰り返し、早送りしたり、遅送りしたり、そういうことを自分のペースでできるわけだから、本当に利用しようと思えば、その効果があるのではないかと思います。

今後について考えていることとしては、ブレンディッド型の授業を使って、フェイス・トゥ・フェイスの関係も折り込みながら、ディスカッションで盛り上がるような授業はできないか、トライしてみたいと思います。

それから、これはさらなる期待ですが、授業の経験、ディスカッションの内容によってコンテンツを部分的に変えていければ面白いかなと思うんです。

オンデマンドの特徴は、大学の枠を超えて授業ができることです。平和教育は、ヨーロッパでは非常に盛んになっているので、機会があればもっと広い範囲の大学と交流したいと思っています。しかしもう一面では、やはり教育コーチといいますが、コーディネーターすることはかなり難しいし、すごいエネルギーが必要なので、私たちだけではとてもできないと思います。そのへんももう一つの課題かもしれません。以上です。

○司会 五十嵐先生には、オンデマンド授業のための手作りの教材の制作と利用ということについてお話をうかがいました。そして、今後の可能性についてもご発言いただきました。

それでは、今度は教員を支えてくだ

さっている職員の立場から、佐藤雅信様にお話をいただきたいと思います。立教大学のメディアセンターの職員として、お話にありましたオンデマンド授業や、あるいはREOの運営にも深く携わっていらっしゃいますので、そのへんの支援体制がうまく整っているかどうか。ノウハウ、その他についてお話をいただければと思います。よろしくお願いたします。

○佐藤 ただいまご紹介にあずかりましたメディアセンターの佐藤です。私からは、日ごろ先生方を支援させていただいている職員の立場から、これまでの先生方の話を受けて、少し報告させていただきたいと思います。

お話の内容ですけれども、先生方の授業を支援させていただいているメディアセンターの業務や、その体制はどういった形になっているのかというところを、まずは紹介させていただき、立教大学のeラーニング環境について、川崎先生や五十嵐先生のご紹介を受けて、ほかにもありますので、それについてもお話しさせていただきたいと思えます。

それ以降は、特にメディアセンターとしましては、コンテンツ制作というところに少しフォーカスして、その流れであるとか問題点、その問題点に対する解決案みたいなところを少し探っていければと思っています。

まず、メディアセンターの業務ですけれども、情報企画委員会という意思決定機関のもとで、教育研究にフォーカスして、V-Campusを核とした情報マルチメディア環境の整備と利活



佐藤 雅信

用支援というのをを行っています。まずこの基盤の整備というところで、ネットワークやサーバー、あるいは認証基盤とか、メール、PC教室といったところの環境の整備。一方では、マルチメディアに関する環境の整備といったところを行っていて、そういった基盤の部分を先生方にご利用いただくためのさまざまな活用支援というものを、最近では業務ボリュームとしては多く行っております。IT系というところでは、ホームページの作成ですとか、あるいはメールの利用支援、PC教室の利用支援。それから、今回のテーマにも関係してきますような授業支援システムの利用支援といったところ。それから、AV系、マルチメディア系に関しては、プロジェクターですとか、こういうノートPCを使った授業に対して、その貸し出しや使い方のお手伝いみたいなどころ。さらには、語学系の先生であれば、その授業で使う英語の教材や初習言語の教材。あるいは、外部の教材をダビングして授業で使う。

さらに進むと、テレビの録画も依頼されたりしています。そういったものを、最近ではIT系、AV系に限らないといえますか、融合されたような依頼がどんどん増えてきておりまして、それだけ先生方の授業でのICTの利用形態というのがどんどん進んできているのかなと感じております。

メディアセンターは、そういった先生方をどのように支援しているかというところですが、まずメディアセンター長は、数学科学科長の木田祐司先生。それから、メディアセンターの課長、今日も聞きに来ていただいていますけれども、このもとで、専任の職員としては、課長を含めて5名でやっております。ほとんどの利用支援という意味では、外部の協力会社の技術力やサポート力に大きく頼って運営し

ているという現状です。

今回のテーマでもありますeラーニングですとか、コンテンツ制作といったところについては、Webコンテンツ制作管理チームの3名で主に運営しています。

それから、立教大学のeラーニング環境ですけれども、まずは下のほうからいきますと、自学自習中心のeラーニング教材というものを、先ほど川崎先生からお話いただいたアルク「ネットアカデミー」、REOのほかにも、「WebClass（ウェブクラス）」というシステムで学習できるオンライン教材を購入しております、例えば情報倫理という科目では、経済学部の1年生が全員必修科目を通じて、このオンライン教材を使って学習することになっております。またMS OFFICE、Word、Excel、PowerPointの使い方についても簡単に学べるようになっております。これらについては、例えばWordですと、今年度は349名、Excelは173名、PowerPointは122名といった学生たちが受講しております、まだまだ宣伝不足というところもあると思いますけれども、こういったものも含めて、学生の学習に役立ててもらえればと思っております。

もう一つは、授業支援システムということで、これは先生の対面授業を補完する、あるいは活性化するためのシステムとして、サイバーラーニング、それからCHORUS（コーラス）と呼んでいるものがあります。サイバーラーニングに関しましては、インターネット上に先生の授業の資料をアップロードして、受講生以外にも勉強させることができるような仕組みとして、2001年度からスタートしました。これに関しては、学生の予習復習に活用させるということなのですけれども、現在、過去3年間、100科目程度で今のところ推

移しております。

一方では、CHORUSと呼んでいるものがありまして、これについては、すべての授業についてあらかじめ授業のホームページを用意しているものとなっています。このそれぞれの授業に対して、それぞれ対面授業を補完するようなさまざまな機能がついておりまして、例えば教材をアップロードしておくほかに、受講生のあいだでディスカッションしたりですとか、あるいは先生に質問を投げかけて、そのフィードバックをしたり、あるいは、川崎先生を中心とした英語の先生方が使われているような、小テストをこの中で課すとか、そういったさまざまな使い方がなされています。

サイバーラーニングは、最近では安定した利用推移をたどっているのですが、CHORUSについては、ここ3年間で253から、今年度は500というように、利用コマ数が増えている状況でございます。

そして、もう一つオンデマンド授業について、五十嵐先生の授業をはじめ、メディアセンターのスタッフを中心に、今回、コンテンツ制作に当たらせていただいておりますので、それについて少しお話をさせていただきたいと思っております。オンデマンド授業の取り組みということで、2004年度からオンデマンド授業流通フォーラムに参加しまして、共同評価実験としてスタートしました。

2005年度から実際に1科目を提供して、早稲田大学とともにオンデマンド授業の交換をするというところからスタートしました。学内の事務局体制としては、学内オンデマンド授業ワーキンググループということで、教務部、メディアセンター、それから総長室といったところでタッグを組んで支援体制をつくりました。

それで、2006年から2007年度にかけ

ましては、各年度1科目ずつ全カ力に設置する科目として授業を制作していきまして、今年度は早稲田大学以外の大学とも授業の相互受配信をしている状況であります。

こちらは、どういうメリットがあったってオンデマンド授業が始まったのかというのを、少し振り返ってみたいと思います。学生にとってのメリット、これは無視できないところだと思うのですが、先ほど五十嵐先生からのお話にもありましたように、ビジュアル化されるということで、理解しやすくなる。それから、いつでもどこでもという話では、これは実際に五十嵐先生の授業でアンケートをとられて、実際にあった回答ですけれども、特に就職活動中の学生は、急にセミナーなどに行かないといけないというのがあります。授業に出席したいのに出席できないというような状況が出てくるわけですね。そういった時にも、オンデマンド授業のようなものがあれば、単位を諦めなくて済むという、切実なる意見が上がっていました。

さらに、BBS というものがありますので、これによって多様な価値観に触れ、コミュニケーションスキル獲得の機会が得られるというのも大きいと思います。

そして、先生にとってのメリットですが、授業コンテンツがデジタル化されるというのもそうですが、やはり学生の受講状況や理解度が確認できて、授業運営がしやすくなるというところが、先生方にとっては大きいのではないかと思います。

もう一つは、BBS によって活発にやりとりされた内容が、さらにその授業に対して付加価値を生むということも、五十嵐先生の授業を拝見して思ったことです。

それから、そういったオンデマンド

授業ですけれども、非常に先生方の負担が重いということが、これまでの支援から感じられました。この制作の流れを見ましても、まず科目を選定します。そのあと担当の先生のところから矢印がいっぱい伸びています。それだけ先生にもものすごく負担がかかっているということだと思えますね。授業計画を策定するところから始めなくてはなりませんし、そのために資料や素材をたくさん集めてこななければならない。それをもとに PowerPoint に落とし込んでいって、今度は長い時間、撮影で拘束されてしまうと。この先生方の負担というのが非常に大きいと思っております。それ以降コンテンツを統合してというところは、制作会社さんをお願いしています。履修情報、履修者の登録ですとか、授業運営についても、ヘルプデスクとともに外部の LMS といえますか、授業支援システムを使わせていただいています。

やはり今お話ししましたように、オンデマンド授業の課題として、コンテンツ制作という立場からお話しさせていただくと、まず先生にとって非常に負担がかかることですね。資料の収集や編集にとっても時間がかかる。授業の映像の収録に長時間拘束される。こういったところの先生方の負担。一方では、対面授業とは別に、教務事務といった作業が必要になりますし、学内のアナウンスも必要になります。オンデマンド授業流通フォーラムの枠組みの中で活用しておりますので、対フォーラムですとか、先生との契約やその他スキームの確立。あるいは、外部の素材を使う場合には、著作権の処理といったものもありますし、こういった全体を考えても、一つの授業制作を行うのには莫大なコストがかかるというのが見えてくるかと思えます。

これに対して、メディアセンターと

しましては、まずは授業収録の負担軽減を考えるような仕組みづくりが必要なのではないかと、一方では、このあたりの煩雑な事務手続きについては、必要な手続きを手順化し、体系化していき、そういった業務を一手に担うようなセンター組織を用意しないとイケないのではないかなということを考えています。まず収録の負担軽減のための仕組みづくりとして、対面の授業中にも収録できるような教室設備にすべきではないかと。例えば今も大教室の中でカメラをあらかじめ設置して、カメラで先生が対面の授業をしている様子を収録していますが、それをそのままオンデマンド授業の教材にできるような設備を整備したらいいのではないかと。それから、メディアセンターとして、これは上層部の方々に強く訴えているところなのですけれども、スタジオ設備の存在ですね。今まで先生方、過去に3作品、今年度4作品を撮影しているのですけれども、授業の合間で空いている部屋を取って、そこで収録しているものですから、チャイムの音が入ってしまったり、学生の足音が入ってしまったりと、先生方にとって非常に良くない環境の中で収録に臨んでいただいていた。これを少しでもスムーズに収録していただけるようなスタジオが必要なのではないかと考えております。

それから、最後に触れたいと思っておりますが、授業コンテンツにさまざまなバリエーションを設定して、先生のさまざまなニーズに対応できるようなコンテンツづくりを心がけないとイケないのではないかと考えます。

さらに、この一連の手続きや文章を体系化してひな型を用意するというところでも、それぞれ今までのやりとりや手続きを受けて、必要なものを整備していくべきだと思います。あるいは、

そういった業務そのものを一手に担うようなセンター組織を整備すべきだろうということで、この部分については、私の上司の課長のほうで働きかけを進めているところです。対面の授業と同じように教務事務作業が発生しますし、対フォーラムですとか、制作会社、先生とのいろいろなやりとりがあります。制作については、進行管理しないといけないですし、著作権の問題もあります。その他、履修生のアナウンスですとか、授業開始後の一連のサポート。そういったものが、対象の授業が増えてくるにしたがって、それだけの業務ボリュームが発生しますので、専門の組織をつくってやるべきだろうというのが、一つの考えであります。

やはり授業のコンテンツ制作には、先生方に多大なる負担がかかっているということと、それに対してやはりコストもかかっているというのが現状だと思います。

これまでは、こういったとてもお金がかかるリッチなコンテンツで、特に五十嵐先生の沖縄ロケのように、映像プラス音声さらに現地取材型ということで、非常にお金のかかる授業コンテンツだったものですが、お金と手間がかかる制作の仕方をしていたと思うんですね。これはこれとして、もっと先生方が気軽にコンテンツ制作に取り組めるようなさまざまなバリエーションを用意して選んでいただくというのもいいのではないかと思います。

例えば、リッチ型というところでは、少しコストを押さえるというところで、例えば先ほど話しましたように、既存の教室設備にカメラや録画出力といったものを用意して、先生が対面の授業をしているその場で、コンテンツをつくってしまうというやり方があるでしょう。こちらはPowerPointと音声、映像をセットで撮ることができる。

一方では、黒板だけを使って、数学の数式をずっと書いて勉強させるような授業もあると思います。さらに、もう少し簡単につくれるという例では、映像プラス音声で、シミュレーション型と書いていますけれども、コンピュータのソフトウェアの操作などを、人が操作している動きをそのままキャプチャーしてというか、取り込んでコンテンツ化することができるわけです。ですから、そういったIT系の授業に関しては、こういったものも有効なのではないかと思えます。

もう少し導入編の内容については、音声プラスPowerPoint。例えばPowerPointの教材があったとしたら、それを声のいい人に読み上げてもらう。それだけでもそれなりのコンテンツがつくれるのではないかと思えます。

最後に、HTMLベース、インタラクティブ性というものが大切だという話もありますので、これはHTML、特にFlashといった技術を使って、動きのあるコンテンツをつくりあげて、学生が、例えば数字のシミュレーション計算がその場でできて結果が分かるとか、そういったものをつくってもいいのではないか。こういうさまざまなバリエーションを用意することで、先生方が少しでも気軽にコンテンツ制作に取り組もうと感じてもらえればなと思っております。

最後に、メディアセンターとしてのこれからの挑戦ということなのですが、まずはICTを活用した授業支援ツールの利用支援と定着ということで、少しでもICTを使って授業を進めていただくように私たちメディアセンターのスタッフとして、そのICTにおけるメリットの訴求というものを進めていくべきだろうと。そして、利用シーンに合った支援ツールの使い方も、機能がたくさんありますので、どのよう

にやっていたらいいか分からないというのがありますし、先生方の授業に合ったやり方をこちらから提案していかないといけないと考えています。

それから、教務事務センターとの連携という部分では、履修登録者データがスムーズに先生方に、授業が始まる時に受け渡してきていけば、先生方も最初から使っていけるといいうところがありますので、これは非常に重要なことだろうと思えます。

さらに、コンテンツの作成支援体制という意味では、まだまだわれわれメディアセンターの中に体制もスキルも足りていない部分がありますので、外部の専門家のスキルを活用しながら、実際に先生を支援するわれわれ側のスキルも上げていかないといけないと思っています。

授業教材のデジタル化という点では、著作権の権利処理という問題が非常に大きいということで、著作権に対する意識の底上げですとか、あるいは、そういった権利処理が必要なものも含めて、デジタルコンテンツの流通のための仕組みづくりというものに取り組んでいかななくてはならないと思っています。

少し時間がオーバーして駆け足になってしまいましたが、以上で報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○司会 スタッフのご苦勞、およびオンデマンド授業を担当する教員の大変さというのが垣間見られたような気がいたします。ここで、残り時間がわずかではございますが、いったん休憩を取ったあと、第三部、討論に入りたいと思っています。

【第三部】

○司会 指定討論者をご紹介します

す。山口和範経営学部教授でございます。山口先生には、今日は教務部長というお立場だけではなくて、オンデマンド授業流通フォーラムの副委員長というお立場で、コメントをいただけると幸いです。そのあと、皆さんからの質疑、および、もし可能であれば発表者の4人の先生どうしの討論という形で進めていきたいと思います。

○山口 今回、教務部長ということで、こういう席に座らされているかと思うのですが、私自身は、実は教務部長になる前の2004年に、立教大学から1年間、サバティカルをもらいまして、その時に、eラーニングに関して、海外のオープン大学などを中心に、ドイツや韓国で共同研究を行いました。私の専門は統計学ですので、統計学に関してのeラーニング教材をつくりたい、大学での統計教育が、日本ではあまりいい方向に向かっていないということをやっと感じていましたので、そのことを改良もしたいということもあり、いろいろやっていました。

それで、寄付講座で統計のeラーニングを立教で実施したいということで、何回か業者にも来てもらったのですが、2004年が終わるころに教務部長に任命されて、結局計画が頓挫してしまい、まだ実現していません。いずれはやりたいと思っていますが。



山口 和範

実は、統計は川崎先生ご紹介になったような内容の、いわゆるどちらかというとスキル系な面も一方であります。ただ、実はスタディからシンキングとか、リーズニングということを

データを使ってきちんと行うための教材として、eラーニングが実際に使えるかどうかということについては、統計の中でもかなり議論があって、今回の中で言うと、たぶん全カリという話をした時に、言語系のいわゆるスキル系のところだと、うまくいくと言っていいと思いますけれども、いわゆる考える力とか、最近でいうと学士力教育の議論中で、創造的思考力というキーワードが入っていると思いますが、そういうものを鍛える時にどのように使えるのかということについては、いろいろ考えることがたくさんあるのではないかと思います。

教育の議論をする時に、あまり経験だけで語るのはよくないのだと思うのですが、私も関係している統計では、実証研究として、学生をランダムに二つに分けて、一方には強制的にeラーニング、一方は対面ということで実験を行い、eラーニングは、超えることはないけれども劣ることはないという結果を出しています。そういうことを確認しながらeラーニングの導入も一方では考えていかないといけないのではないかと思います。

ただ、対面と組み合わせると、例えば五十嵐先生がおつくりになったようなものを、例えば対面の授業の中で教材として使うということは、非常に効果のあることだと思います。ただ、大学としてそれに取り組もうとした時に、今たぶん立教大学で4科目めだと思うのですが、立教大学で数千コマの科目が動いている中で、それが実際に全科目でできるかという、大学としては不可能ですし、全カリだけについてやるということもたぶん不可能です。そうすると、最後、佐藤さんのお話の中にあつたように、コスト面のことは非常に重要に考えていかないといけないのではないかと思います。

立教大学の現状は、吉田先生から指摘のあったように、個人的な行いとか点の集合というところに、現状はなっているかと思います。ただ、教務部というか、教務部長としては、それが組織的な流れになっていかないといけないのだと思いますし、そういう面というと、解決すべきはたぶんコストの問題です。一方、今、立教大学で何が問題かという、学生の学習時間をどのように増やしていくか。現在、いろいろな形で調査が行われていて、立教大学の学生の学習時間の少なさが明らかになっています。立教大学での調査では、少なくとも4分の1の学生は、1週間で勉強時間がゼロと平気で答えているわけです。そういう学生に勉強させるという時に、こういういわゆるインターネットを通じたような教材は、教員が宿題を出すというだけでなく、少し関心を持ちながらやらせるというところかというと、かなり有効なのではないかと思います。

また佐藤さんのお話にあった、授業を録画して、学生があとから見られる。それを見ることだけでも勉強になると思うので、そういう仕組みづくりというのは、まずやっていかないといけないのではないかなと思います。

特に全カリであるとか、青木先生のほうから人文科学という話がありましたが、ああいうところの授業というのは、一期一会的な意味合いもあると思いますが、財産としての価値というものもかなりあると思うので、そういうものを残すということも、eラーニングとはちょっと趣旨が違うかもしれませんが、勉強させるという意味では非常に重要なのではないかなと思います。

それで、ぜひ吉田先生におうかがいしたいのは、こういう財産として、大学で行われているものを資産として残しながら、それを教材として活用して

いる事例があったら、ぜひ教えていただきたいと思います。もちろんMITとかでやられているようなものだけではなくて、もう少し世界的にいろいろな形で。要するに、大学の講義は流しっぱなしで、消滅していつしまっているようなところが、日本の大学などは特にそういう感覚がありますので、これは本当に記録としてきちんと残しておくのが非常に重要なのではないかと思いますので、もしご存じでしたら、教えていただければと思います。

○司会 では、山口先生から質問が出ましたので、まずは吉田先生に質問にお答えいただければと思います。

○吉田 十分お答えできるかどうか不安ですが、要は何かを残すということは、それをもう一度どこかで使うということを想定するから残すわけですよ。図書館とかアーカイブというのは、まさしくその場限りではなく、別な形で使われるか、使われることを目的としているわけです。その時に、どこの部分を残すかということになってくると思います。授業に登録している学生であれば、それを繰り返して見るということは、単位を取る上で重要になってくるという部分はあると思うのです。

では、その講義を丸々残してもいいけれども、ほかにどういう使い道があるかということですが、例えば、翌年度、もう授業に出て来なくて、それを観て問題を解いて単位を与えるという形が大学でできるかどうか。もしそういう計画がおありになるのであれば、講義そのものを残しておくということも、それはそれで価値があると思います。ビデオみたいなものですね。

ただ、残念ながら、多くの大学では講義そのものを丸々残すという方向になかなか行かないですね。放送大学などは、あれは4年間繰り返して流します。前期後期合わせて8回分ですね。

ただ、試験問題だけには変えるということにして4年間使っています。これは大学としての意思決定ですけれども、もし同じ講義を使って同じような形で単位を与えていくということであれば、残す価値は十分あると思いますし、まさしくeラーニング型のところというのは、そういうことをよくやっています。

ただ、通常のキャンパス型の大学は、先生の生の講義があってこそ、といった部分があって、講義そのものを残していくという方向には、今のところあまり向かっていないですね。方向としては何が大変かという、教材づくりが大変なのです。教材というのは、講義の教材というよりも、講義の中で使って見せるための教材、資料です。それを共有しようという動きは、全世界的に始まっていますし、山口先生がご指摘になられたMITのOCW (Open Course Ware)などはそれですね。日本もOCWの連合体ができましたから、それと連携しています。ただ、日本は資料を残すというより、あれはまだ講義を録画したものを残しているというものにむしろ近いのですけれども、そういう方向になっています。

あと、教材を残すという方向では、OCW型のもの、アメリカではもう一つ、マローというのがいいのか、メルローというのがいいのかよく分かりませんが、ワインの中でメルローといわれているものがありますよね。あれを振ってカリフォルニアの州立大学が中心になってつくった教材のレポジトリシステムがあります。Web化した教材を、つくられた方に所有権を置き、それを集めて一覧化するというものもあります。

では、ここに入れる教材をどうするかという時に、領域別に自薦他薦両方に基づきそれをレビューする委員会が

あって、掲載の可否を決定していくのです。これは今のところ利用料金は無料で、誰でも使っていていいということになっています。

ただ、それが十分使われているかということになると、なかなか難しいところがあることも確かです。

講義そのものを残すという方向については、それぞれの大学の目的とかかわってきますが、大学を超えて教材を共有しようという方向は、OCWなり、あるいはメルローなりというものが、今の動きとしてはあります。

さらにもう一つ言わせていただければ、Webの公開性を利用するという点については、それをFDにしていくという動きもありますね。MITなども多分にFDの意味合いを持ったOpen Course Wareをやっているのですけれども、そうではなくて、先生方が自分の授業そのものをいかに変えていくか、改良していくかという時に、Webを使っています。これは、例えば少し自分の授業を工夫したいとそのプロジェクトにアプライします。そこでアプライすると、担当している授業の様子をそこに事細かに載せていくわけです。例えば、シラバス、学期途中のレポートの課題、それに対する学生のレポート、途中の授業評価、あるいは、工夫してつくった教材などを掲載していきます。それについて、外側からいろいろなコメントや意見をもらうという仕組みです。これはeラーニングとはちょっと違い



ますが、インターネットと教育という
ことを考えた時に、一つの試みとして
そんなものもあり得るかなということ
で、ご紹介したいと思います。

○司会 それでは、ご質問やご意見等
ありますでしょうか。

○質問 私は外部からの参加者で、イ
ギリスの出版社でマクミランという会
社に勤めている小野と申します。

先ほど先生方のご講演をうかがいま
して、eラーニングの柱は三つあるの
かなと感じました。まず一つは、シス
テムの開発です。いわゆるテンプレ
ートをつくることですね。二つ目に大事
なことは、コンテンツをつくる。一番
目につくったシステム、ないしはテン
プレートに流し込んでコンテンツをつ
くっていく。三つめに関しては、サポ
ート体制を構築するということがある
と思えました。特に私どもは出版社で
すので、eラーニングをつくっている
という立場にある中で、今一番悩んで
いるところは、三番目のサポート体制
です。これが何なのかなということ
で、ずっとお話をうかがってしまし
て、キーワードが、五十嵐先生のご
講演の中にありました。受講率をどう
やって高めるかというお話があった
ように思いま

す。
受講率が高ければeラーニングは成
功なのか、あるいは、コンテンツがす
べてなのか、そのへんはよく分かり
ません。ただ、われわれはeラーニ
ングを売る立場として、受講率が高
いことは非常に大事なことです。そ
の中で一番大事なのはサポートシス
テムだと思います。いろいろなキー
ワードが出てきた中で、コーチング
という言葉が使われた方もいっしょ
にいますし、サポートという言葉が
使われた方もいっしょにいます。わ
れわれはよくメンタリングだとか、
チュータリングとかいう言葉を使っ
ています。そういう言

葉を使いながら、いわゆるサポートシ
ステムをどうするのか、このeラー
ニングの中でサポートシステムをどの
ようにとらえていらっしゃるのか。佐
藤さんのお話の中に、よく学生アル
バイトを使われているということがあ
りましたし、吉田先生のお話の中
にも、コーチをやっているのはアル
バイトだというようなお話もあつた
と思えますが、そのサポートシステ
ムというのは、どの程度の位置を占
めているのか、それをどういう形で
任せていらっしゃるのか、そのあた
りについておうかがいしたいと思
います。

○司会 支援体制について、佐藤さん、
ご説明いただけますか？

○佐藤 まず、立教大学の中での授
業支援システムとしてのサポート体
制というところについて、最初にお
話しさせていただきます。まだ展開
している授業の数が少ないということ
もありまして、自前でシステムを持
つ費用対効果がないといえますか、
まだそこまで達していないので、
基本的には授業支援システムであ
るとか、それにかかわるヘルプデ
スクといったところは、完全に外
部の仕組みを利用させていただ
いています。

一方で、学内ではどういったこと
をしているかといいますと、まずは
学生アルバイトというところで、学
生アルバイト自身の勉強にもなる
という意味で、最前面に配置しま
して、さまざまな先生方のサポ
ート依頼ですとか、そういったと
ころでは、まず学生を活かせる
ところは学生に対応してもらおう
というところで取り組んでいます。

それ以外の、例えば授業支援シ
ステムでのサポートですとか、あ
るいはコンテンツ制作に関する
ところのサポートについては、や
はり外部の専門的なスキルを持
った人に常駐してもらって、そ
ういった人たちの力を借りなが
ら、

体制を確保しているというのが今の実態です。

○司会 五十嵐先生からは、教育コーチについてお願いします。

○五十嵐 その問題もあるのですけれども、一番私にとって問題だと思われるのは、最初に「乗せる」やり方です。まず乗っかってこないのが現状です。つまり、授業をやっても、履修登録している学生が半分しか来ないというのは、通常の授業でもあまりないと思うのです。これは一体なぜなのでしょう。最初に乗せるということが非常に難しいです。ですから、Eメールを出して、秒読みのカウントが流れるとか、「やるぞ、やるぞ、やるぞ」というサインが出るようにするとか。オンデマンド授業ではちょっと遅れてしまうと復帰することがなかなか難しいということもあるのかなと思ったりもします。

ですから、先ほど、最初に一回集めるということを申し上げました。それで顔見知りになりながら、さあ、これからやるぞという流れに持っていく。そんなことをやってみたらどうかなと思っっていますね。

○司会 まだまだ続けたいのですが、お約束の時間が来てしまいました。今、小野様に、本日のシンポジウムの内容をうまくまとめていただきました。

立教大学はどういう教育を目指すのか、そのためにはどういう教育システムを構築していくのかという根本的な話がまずあって、それからeラーニングについても語らなければいけないのかなというような感じもいたしました。

その流れに沿って、さまざまなFDを展開していく必要もあるのかなということを今日あらためて思いました。

今日はとても短い発表時間の中で、吉田先生をはじめ、ほかの4人の先生方、わかりやすくご発言いただきまして、大変勉強になりました。どうもあ

りがとうございました。

これにてシンポジウムを終了させていただきます。ありがとうございました。